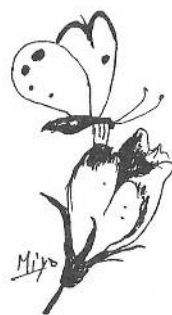


気になる多産の帝妃たち

新井 宏



歴史上には、気になる帝妃が多い。かつて太宗の後宮にありながら、後にその子の高宗の後宮に入り、ついには病弱の高宗に代わって、中国で唯一の女帝として唐王朝に君臨した則天武后や、ドイツ人でありながら、ロシヤのピョートル三世に嫁ぎ、クーデターで夫を殺害して女帝となったエカテリーナ二世、あるいは天智天皇の皇女で、天武天皇の皇后となった持統天皇などにも興味をそそられるが、それにも増して、仲睦まじく一ダース以上の子供達を生み続けた帝妃達の存在が気になる。

ムガル帝国のシャー・ジャハーン¹の皇妃ムムターズと、神聖ローマ帝国のフランツ一世の帝妃マリア・テレジアである。もっともマリア・テレジアの場合は、フランツ

一世を迎えて皇帝に据えたのであるから、実質的には女帝といふべきであろうが、建前上は神聖ローマ帝国の皇帝はフランツ一世だから帝妃である。ムムターズの場合は、十九年に及ぶ結婚生活の間に十四人を出産し、マリア・テレジアの場合も、十九年間に十六人も出産している。

ムガル帝国は回教徒の国である。正妻を四人まで持てるし、後宮には多くの美女を住まわせることができる。皇帝たる者が、何もひとりの妃に子供を生み続けさせることもあるまいと思ふのが率直な感想である。休む暇もなく孕みつづけた妃を十九年間も愛しつづけて、しかも末子出産の後で、産褥死してしまったムムターズのために、

巨額の費用と長い年月をかけて墓廟タージ・マハールを建設して葬っている。これほど愛された帝妃、いや女性が、かってあったであろうか。

一方、立場は変わるがマリア・テレジアも、人は良いが政治や軍事の才のない初恋のフランスを愛し続け、フランス一世の死後は喪服を纏い一生を過ごした。こちらは、「戦いは他人にまかせておけ、幸せなオーストリアよ、汝は結婚せよ」のハップスブルク家であるから、子作りに励んだとしても不思議はないが、席の暖まる暇もなかったマリア・テレジアの活躍を知る我々にとっては、よくも十六人も産み続けることができたものだと感じてしまう。

夫の子を妻が産む。その当たり前のことでも、今の日本では一ダースを越えて生んだらニュースである。しかしギネスブックを見れば、二十七回の出産で、計六十九人を生んだロシアの農夫の妻を伝えている。十四人や十六人の出産で驚くのは、現代の感覚なのかも知れない。事実、多産の伝統を誇るハップスブルク家では、マリア・テレジアの十女マリア・カロリーネが、粗暴で無教養なナポリ王フェルナンドとの結婚生活に耐えながら、十六人の子をもうけているし、三男で後に皇帝になったレーオポルト二世も、その妃のスペイン王女マリア・ルドヴィカとの間に十六人の子をもうけている。奇しくも親子ともども十六人づつの子を産んだのは歴史のいたずらだっ

たのであろうが、それにしても、日本の歴史上では、似たような例に出会わない。

なぜ彼らは、それほど深く愛し合えたのであろうか。筆者のささやかな人生経験からは不思議でならない。ムターズとはどんな女性だったのだろうか。よほどの美人だったのであろうか。また、皇帝フランス一世は、噂通りのちょっと軽薄でお人良しな男に過ぎなかったのだろうか。そんな疑問について、いくつか成書を読んでみた。そして勝手に得心した。

ムガル朝は、チムール六代孫で母方の祖もジンギスカンに連なる初代バールブルが、大宛の名で知られるフェルガーナを出て、一五二六年に征服地インドに立てた王朝である。ちなみに、ムガルとはモンゴルの意であるが、民族的にはトルコ系である。この同じ年に、オスマントルコはモハーチの戦いでハンガリーを破り、その後のハンガリー支配を確立している。トルコ民族の膨張期で、戦争には既に大砲や火縄銃が使われ始めている。

ムターズは、ムガル朝のペルシャ系重臣ギヤース・ベグの孫娘で、一六一二年に十七歳で第四代ムガル皇帝ジャハーンギールの第三皇子シャー・ジャハーンと結婚している。その五年前にアーグラ城内で催された市で、シャー・ジャハーンがひと目惚れしたのだという。ところが、ちょうどその年、彼の父の皇帝ジャハーンギールもギヤース・ベグの娘メフルン・ニサー（のちの皇妃

ヌール・ジャハーンに想いを寄せている。その時、ジャハーンギールは三十六歳で、既に何人もの皇妃と、数え切れないほどの妃妾をもっていたが、メフルン・ニサーの方も子持ちの寡婦で、すでに二十九歳であった。そしてメフルン・ニサーが実際に後宮に入るのは、その四年後すなわちムムターズが結婚する一年前である。

男女の仲は判らない。メフルン・ニサーはまたたく間に第一皇妃の座をかちえてヌール・ジャハーンの称号を贈られる。聡明で知性ゆたか、しかも才気煥発で、禁欲と清貧を旨とするイスラム信者でもあった彼女は、学者肌で政治や軍事をあまり得意としなかった皇帝に代わって、まもなく政務のほとんどもを取り仕切るようになる。

しかし、則天武后やエカテリーナとは異なって、ヌール・ジャハーンには一貫して皇帝に仕えるという立場をとり続ける賢さがあった。後世の画家が描いた肖像画では、肉感的というよりは、きわめて理知的で端正な顔立ちである。伝えられるエピソードから見ても、皇帝との夫婦の絆は、シャー・ジャハンとムムターズの間のそれに劣らなかつたようである。

シャー・ジャハーンの皇妃になるムムターズは、皇妃ヌール・ジャハーンの弟アーサフ・ハーンの娘である。後世の肖像画で見ると、ヌール・ジャハーンと実に良く似ていて、瞳が大きく、目元が涼しく、清楚で理知的である。それでいながら、その瞳を見つめると、男心

に訴えかけてくるような想いのする顔立ちである。ペルシャ系の美人一族だったのであろう。

ムムターズは結婚するとすぐに妊娠し、翌年から七年間、毎年連続して出産する。その間、まだ第三皇子であった武人の夫は、デカン地方やラージャスタ地方の攻略に東奔西走しているが、ムムターズも陣中に常に付き添っている。その後、夫シャー・ジャハーンが父帝の無理な指示に逆って反乱を起こし大敗して南に逃げた時も、それから再起してアングラを攻め、再び大敗し南インドに逃げた時も、北上してプルハーンブル城を包囲しながら、追討軍の前に父帝に許しを請うた時も、そして再び父に犯意を抱きスインド地方に向かった時も、更には父帝の死後の政争に勝ち、第五代の皇帝として叛乱を鎮圧した時も、ムムターズは常に行動を共にし、子供を産み続ける。最後となった第十四子の出産も宿宮先のプルハーンブルであった。

灼熱の国である。その中にあって、いつも身重な体で、しかも逃げ回ることの多かった日々は、皇妃の生活とは、はるかに隔たったものであった。いわば夫婦である前に戦いの同志であつたはずである。事実、第三皇子のシャー・ジャハーンが皇位につけたのも、父帝の死に際して、ムムターズの父アーサフ・ハーンが、機先を制する動きをとつたお蔭であった。あるいは、ムムターズは天武天皇を助けて壬申の乱を勝ち抜いた持統天皇の立場に近く、

伯母ヌール・ジャハーンのような政治的な存在だったのかも知れない。

だから死に臨んで、喜びも悲しみもすべて分ち合った皇帝に「新しい皇妃を迎えないように」とか「ムムターズの名を伝える美しい墓廟を造るように」と頼めたのであろう。その時、皇帝は三十九歳であったが、悲しみて髻が真っ白になってしまったと伝えられる。そして再び皇妃を娶ることなく、主体工程だけでも二万人で四年間、完成まで二十二年を要して、白大理石のタージ・マハールを造る。工費は諸説あるが、一千万ルピーと云われる。一ルピーで八十キロの小麦が買えた時代である。

伝承によれば、アーグラ市郊外のヤムナー河畔に立つ白のタージ・マハールには、その対岸にシャー・ジャハーン

の黒大理石の墓廟が立てられる予定だったという。しかし、事実はちょっと異なる。シャー・ジャハーンは、ムムスターズの死後、さすがに新しく皇妃を迎えることはなかったが、房事は盛んで後宮の妾妃だけでは満足せず、廷臣の妻女まで手を出して鬻ぎを買った。そして、その晩年には、ムムターズの同腹四人の皇子達の間で、凄惨な政権争いが起こり、戦いに勝った第三皇子オーラングゼーブによって、シャー・ジャハーンはアーグラ城内に幽閉されてしまった。

シャー・ジャハーンは、タージ・マハールの他にも、彼の名をつけた新都シャーハーナーバードの建設を

精力的に進めている。当然ながら、それらの建設には政治的な意味があったはずである。タージ・マハールの建設も妻への追慕という面は間違いないとしても、そこには何らかの政治的な背景があったに違いない。ムムターズの役割に、政治の臭いを感じ取る時に、やはり純愛物語とは違う世界があったことを知る。そして、それなら私にも理解できるような気がして来る。

さて、それではマリア・テレジアの場合はどうであつたらうか。

マリア・テレジアはハップスブルク家の皇帝カール六世の長女として一七一七年に生まれている。彼女の生まれるちょっと前のヨーロッパは、スペインのハップスブルク家のカルロス二世が、嗣子を残さず他界したため、スペイン継承戦争の最中にあり、ヨーロッパの列強が利害をめぐって激しく争っていた。ちょうどその中で、今度皇帝ヨーゼフ一世が天然痘のため嗣子を残さず急逝してしまった。そのため、スペイン継承戦争を戦っていた弟カールが急遽呼び戻され、カール六世として帝位につく。ところが、そのカール六世にもなかなか王子が恵まれない。

そうこうしている内に、カール六世の帝妃クリスティアは体調を崩して出産を望めなくなってしまう。ハップスブルク宗家で男系が絶たれることは、再び大規模な継承戦争を生むのが必然であった。当時のヨーロッパで

は、王室間の結婚が網のように巡らされ、有力者であれば誰にでも王位継承権が生ずる状況であった。それは婚姻により国を拡げてきたことで、領土が各地に散らばっているハップスブルク家にとっては崩壊を意味した。

その事態を憂いたカール六世は、領土の一部割譲という犠牲を払って、ブラグマティシユ・ザンクチオンという相続順位法をつくり、王女への王位継承権と領土の不分割相続を国の内外に認めさせる。それは長女マリア・テレジアへの継承を念頭に置いたもので、マリア・テレジアが七歳の時に公示され、十一歳の時に国際的な認知を受けた。

そうなるとマリア・テレジアが誰と結婚するかが大問題である。自薦他薦のひきもきならぬ中で、選ばれたのはロートリンゲンの公子である。ロートリンゲンは後年、独仏の領土争いが続くアルザス・ロレーヌ地方の一小国であったが、その選択の方がハップスブルク家の独立を守り易いとの判断があったのは間違いない。それにロートリンゲンは敵国フランスに国境を接していて、防衛上も好都合であった。

しかし、理由はそればかりではなかった。ハップスブルク家の首都ウィーンは、二度にわたってトルコの猛攻を受けているが、二度目の一六八三年、包囲されて落城寸前だった時に、ロートリンゲン公カールがポーランド王と共に救援に駆けつけて、トルコ軍を破り、逆に二世

紀近くトルコの支配下にあったハンガリーをハップスブルク家のもとに取り戻してくれたことがあったからでもある。

最初は、ロートリンゲン公の長男が候補であったが、天然痘で夭折してしまい、次男のフランツが内定する。その頃、マリア・テレジアより九つ年上のフランツは、父の跡を継いで既にロートリンゲン公であった。当時のフランツは、何事にもとらわれることのない無邪気で快活な若者で、ウィーンに招かれた時には、皇帝をはじめとしてその一家の人々からすっかり気に入られたという。肖像画を見ると、幼いマリア・テレジアが、もう彼の虜になったというのも分るように思われる。

しかし、この結婚話は順調に進まなかった。それまでフランスの友好国であったロートリンゲン公がハップスブルク家のものとなることは、フランスにとって大脅威であった。そして国際的な画策のもとで、フランスはフランツに対して、ロートリンゲン公から将来のトスカーナ公に「国替え」することを、結婚の条件として突きつけた。

ロートリンゲン公にとっては著しく不利な条件であったが、フランツはハップスブルクを選ぶ。マリア・テレジアへの愛があったかも知れない。若い時のマリア・テレジアは実に美しい。後にハンガリーの国会に乗り込み、長男ヨーゼフを左腕に抱えて、涙でプロイセン戦の支

援を訴えた時の肖像画など、見惚れてしまう。

そして結婚式は一七三六年、マリア・テレジアが十八歳の時にウィーンで行われた。その時、皇帝カール六世はまだ元気であり、新婚のふたりの間に男子さえ生まれれば、継承問題は解消するはずであった。しかし、三年間にわたり相次いで女子は生まれるが、男子は恵まれない。そうこうしている内に、皇帝カール六世が、きのこ料理の中で急死してしまった。

ブラグマーティッシュ・ザンクチオンという相続順位法を事前に準備し、国際的にも認めてもらっていたとはいえ、当時のヨーロッパでは平気でそんなことは無視する。各国から異議が出され、勝手な形で継承権が主張される。その情勢を見て、隣国が領土の侵食を準備し始める。そして現実には、皇帝カール六世の死後からわずか二ヶ月でプロイセンのフリードリッヒ王がシュレージエンに侵入する。有数の農業、商工業地帯であったシュレージエンはハップスブルク家にとって富の源泉であった。しかし、新式の武装を整えたプロイセンの前には、準備の全くできていなかった現地軍では手も足もでなかった。

これを見て、隣国バイエルンもフランスと組んで、ウィーンに向かう意向を示す。まさに四面楚歌であり、プロイセンの要求に屈してシュレージエンを割譲して、事態を取捨するというのが、当時の現実的な解決策だった。

しかし、マリア・テレジアには現実が分っていなかつた。

た。父帝が定めたブラグマーティッシュ・ザンクチオンの領土不分割の原則に忠実に、シュレージエンの分割を断固として拒否する。敵フリードリッヒ王が、かつて父帝カール六世に命を助けられたことがあり、それなのにといい忘恩の仕打ちに、怒りがあつたのかも知れない。そして歴史の回転が始まり、それがハップスブルク家にとつて幸いした。

例え経験乏しい女王であっても、方向を明確に示せば、国内はまとまる。そしてモルヴィッツでプロイセンとの本格的な戦いに臨む。

さすがに当時のハップスブルク家はヨーロッパの大国であった。それに対して、プロイセンは何といっても新興国で公国から王国に昇格したばかりであった。したがって戦機はハップスブルク側にも十分にあつたが、まずい戦い方で敗れてしまう。決して大敗したわけではなかったが、情報戦も巧みなフリードリッヒ王は、これをプロイセンの大勝と宣伝して国際世論を盛りあげる。そして各国間でハップスブルク家の分割が協議され、ポヘミアの首都ブラーハが陥され、神聖ローマ帝国の帝位もバイエルン家のカール七世に移ってしまった。

そんな中で、マリア・テレジアは起死回生の策にでる。ハンガリーに向いて、ハンガリー王としての戴冠式を行うと言いついたのである。

ハンガリー全土がハップスブルク家の支配化に入った

のは、前述のようにトルコによるウィーン包囲を撃退した後の一六八六年で半世紀ほど前である。もともとハンガリーはポヘミアと同じく独立貴族の集合体的な国で、王と云ってもその上に乗っかっている存在に過ぎず、実権は貴族の集合体であるハンガリー議会が握っていた。王冠はハップスブルク家が受け継ぎ、マリア・テレジアは自動的にハンガリー女王となっていたが、情勢は厳しかった。

もちろん戴冠式挙行はきっかけを求めてのことである。それから五ヶ月間にわたって、ハンガリー議会との実に粘り強い交渉を続ける。そして女王のために、六万人の軍隊と四百万グルデンの軍資金を供与するという成果を勝ち得たのである。もちろんそのためにハンガリー議会に大幅な譲歩もしているが、生まれたばかりの王子ヨーゼフを抱き、ハンガリー人に窮状を涙で訴えた演出は、女性ならではの効果をもたらした。その点では、マリア・テレジアもフリードリッヒ王に劣らず、きわめて宣伝上手であったといえよう。

十八世紀末のハップスブルク帝国の人口を見ると、本拠地のオーストリアは二百万人に満たずチロルを加えても、四百万人に過ぎない。それに対してハンガリーは八百万人の人口を抱え、ポヘミアやモラヴィアも四百万人を数える。人口的に見る限り、ハンガリーは大国であった。そのハンガリーがマリア・テレジアを支援するとい

う。それは、ハップスブルク家にとっては全く新しい意味を持ったはずである。

ハンガリーでの成果が、マリア・テレジアの名声を一気に高める。フリードリッヒ王の苦戦もこの時から始まった。紆余曲折の後に、結局はシュレージエンをプロイセンに譲ったものの、ハップスブルク家はポヘミアを取り戻し、当初の領土規模を維持する。一時的にポヘミアを奪い、皇帝カール七世として帝位についたバイエルン選帝侯は、逆にバイエルン領をハップスブルク家に陥とされ、失意の内に他界してしまう。そして神聖ローマ帝国の帝位が再びハップスブルク家にもどり、一七四五年にはマリア・テレジアの夫フランツが皇帝フランツ一世として選出される。

さて、それではフランツは結婚以来どのようにしていたのであろうか。

結婚直後のフランツは義父の皇帝カール六世に大変気に入られていた。そして、カール七世は、フランツに戦勲を上げさせるため、トルコとの国境の戦いに総司令官として派遣している。しかし、ウィーンを開放したローリンゲン公の孫も、期待に反してバルカン南部を失ってしまった。また生まれる子供達が、相次いで女の子であったことも影響して、よそ者のフランツは肩身の狭い思いをしていたはずである。

プロイセンのシュレージエン侵攻に際しては、フラン

ツもプロイセン王の要求に従おうとの意見を持っていた。そこには個人的に知るフリードリッヒ王の人物を信頼しているフランツの姿があった。それらのことが後世、お人好しで政治や軍事に才能のないフランツの風評を生む。たしかに、当時の国際状況の冷徹さなどについては、良家の子息フランツには理解しえないものがあつたろう。そしてその後、ハップスブルク家の重要事項は全てマリヤ・テレジアが主導することになり、それがますますフランツのお人好しという風評を定着させる。

しかし、フランツは無能だったのであろうか。それならなぜマリヤ・テレジアにあれほど深く愛されたのであろうか。

実はフランツは、立場を良くわきまえた極めて有能な男だったのでなかろうかと考えられる面がある。それは彼が領国トスカーナの経営に示した抜群の実績による。

フランツはマリヤ・テレジアと結婚するに際して、ローリングゲン公国を放棄せざるを得なかったが、その代わりにトスカーナ公国の継承権を得ていた。そして実際に旧領主メディチ家最後の君主コシモ三世が他界し、トスカーナ公として即位したのは、結婚した年の翌年である。

その頃、トスカーナ公国の財政は完全に破綻していたという。小とはいえ、トスカーナ公国はフランツ自身の手領地である。栄光の都フィレンツェを中心とするトスカーナ公国の財政を立て直すことは、フランツの最大の課題

であった。そして彼は、経済活動を再び活性化するための施策を次々に実行する。もともと伝統的な商業地域であったことも幸いしたのであろうが、トスカーナをして再び先進国に飛躍させることに成功する。

トスカーナ公国は、シュレージェンをめぐるプロイセンとハップスブルク家の戦争に、多額の資金を提供し、兵士も送っている。フランツの内助の功であるが、それを可能にしたのは、トスカーナ公国の富である。またウィーンにマイセン並みのアウガルテン磁器工場を作り、彼のホリチュの領地では模範的な農業経営に成功している。そのようなこともあって、フランツ一世が逝去した時には、二千万グルデン近くの現金と数百万グルデンに上る工場や土地を遺産として残しており、これによってハップスブルク家の戦時負債のすべてが償却されたと言われているほどである。

それにも増して、フランツ一世には人材を見る目があつた。マリヤ・テレジアの治世を助け、大活躍した大臣などには、フランツ一世の推挙による者がかなりの数にのぼるが、なんと云ってもハウクヴィッツを発掘したことが、ハップスブルク家の隆盛の基礎となつた。

当時のハップスブルク家の財政は、中世そのまま、貴族や教会に対しては徴税権がなく、軍事動員をするにも、いっさい貴族の協力を要請するしかなかった。それでは近代国家の形を整えたプロイセンには勝てない。

中央集権的な財政を確立させ、中央直属の軍隊を持つことが焦眉の急であった。しかし、ハップスブルク家の重臣達はいずれも貴族であり、それは彼らの権益を著しく侵害することで、当然賛成するはずがなかった。

そこにハウクビッツが登場するのである。おそらくフランツ一世のもつ経営感覚の鋭さであろう。マリア・テレジアの全面的なサポートもあって、ハウクビッツの徴税制度改革が大成功する。

このような人材を発掘できたフランツが無能であったはずがない。経営の才があり、人材を見る眼を持ち、しかも人柄が良かったとなれば大人物である。その上、フランツの偉かったところは、マリア・テレジアを常に立て続けたことである。厳しい試練を経て、自信のついてきたマリア・テレジアにも独自の価値観があり、政策面での意見不一致も数多くあったであろうが、フランツはそっとアドバイスするだけに留める。とても凡人にはできないことだ。

そんなフランツに対して、マリア・テレジアが全面的な信頼を置いていたのは間違いない。夫婦であるから、時にはもめごともあったであろうし、世活の知恵として政治的な話は避けていたかも知れない。しかし、稀に見る政治能力に恵まれたマリア・テレジアが、フランツの支えなしに、あれほどの活躍ができたと思うのは、その業績を知っての確信である。だからこそ、フランツ

亡きあと、マリア・テレジアは寢室を灰色で覆い、喪服を脱ぐことなく過ごし、修道院に入ろうとさえしたのである。

マリア・テレジアとフランツのことを調べてみて、私なりに理解し得たことは、ふたりの間にあった人間的な信頼感の凄さである。それは、シャー・ジャハーンとムムターズの場合のように、共に戦った同志的な結びつきとは異なるが、やはり十六人の子をつくったのは伊達ではなかった。

かくして、気になる多産の帝妃たちも、やっと私の頭の中に所を得たように思う。

(本文を書くにあたり、主として、渡辺建夫『タージ・マハール物語』と江村洋『マリア・テレジアとその時代』を参考にした。)